琉球大学学術リポジトリ

お泊り保育の意義に関する一考察 ー山口県にある私立A幼稚園のお泊り保育実践における参加観察を通してー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2012-12-21
	キーワード (Ja): お泊り保育, 参加観察, 事例研究
	キーワード (En): child care camp, participant observation, case study
	作成者: 中尾, 達馬, 山内, 裕子, NAKAO, Tatsuma, YAMAUCHI, Yuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25525

お泊り保育の意義に関する一考察[1]

――山口県にある私立A幼稚園のお泊り保育実践における参加観察を通して――

中尾　達馬*　　山内　裕子**

An exploratory study for the significance of the child care camp (*Otomari-Hoiku*): Based on the participant observations of the child care camp which held at the A-kindergarten located in *Yamaguchi-ken*

Tatsuma NAKAO　　Yuko YAMAUCHI

本研究の目的は、山口県にある私立A幼稚園のお泊り保育実践における参加観察を通して、(1)お泊り保育を成功させるために行っている保育者の工夫、(2)お泊り保育当日の子どもの様子、保育者や参加観察者が考えるお泊り保育の意義、(3)保護者がお泊り保育に期待すること、および保護者の目から見たお泊り保育を経験することによって生じた子どもの変化、(4)子どもがお泊り保育で一番楽しかったことの詳細を明らかにすることであった。調査の結果、非日常的な「夜の活動」(e.g., 集団就寝、花火、夕べの会）を伴ったお泊り保育には、一定の教育的価値がある可能性が示唆された。特に、お泊り保育には、今後の園生活に向けて、友達や保育者とのつながりを楽しい思い出とともに広げるという効果があるのかもしれない。

キーワード：お泊り保育、参加観察、事例研究

The purposes of this study were to reveal the following 4 points through the intensive participant observations of the child care camp which held at the A-kindergarten located in *Yamaguchi-ken*: (1)the devisal which preschool teachers performed to succeed the program, (2) the mental state of the child at that day and the significance of the program which preschool teachers and observers considered, (3)the expectations which parents had for the program and the changes of children who experienced the program, (4) the most enjoyable event of the child care camp. Main results showed that the child care camp including "the night events" (e.g., sleeping arrangement (group), firework, the evening festival) had a certain educational importance. The program might have effects which spread personal relationships of children with gladsome memories, in particular.

Key words: child care camp, participant observation, case study

*琉球大学教育学部 (Faculty of Education, University of the Ryukyus)
**東割保育園 (Higashiwari Nursery School)

[1] 本研究は，第一著者指導のもと，山内（宗像）裕子さんが，2008年に山口芸術短期大学専攻科に提出した卒業論文データの一部を再分析し，加筆・修正を行ったものである。また，本研究を実施するにあたりご協力頂きましたA幼稚園の園児，園長先生をはじめとする諸先生方，保護者の方々，そして参加観察者としてご協力頂きました滝沢　潤先生（大阪市立大学），専攻科4期生のみなさんに心より感謝を申し上げます。

問題と目的

はじめに　園生活の中で、行事は年間の保育計画の重要な節目となっている。ただし、行事は、ただ単に行えばよいというものではなく、その教育的価値を十分に検討し、子どもの負担などを考慮し、適切なものだけに精選すべきものでもある（幼稚園教育要領　第3章　「第１指導計画の作成に当たっての留意事項」「2特に留意する事項」の(4)を参照のこと）。そこで本研究では、「お泊り保育[2]」という行事を対象に、その教育的価値を精査することを試みる。なぜなら、お泊り保育は、入園式、運動会、誕生会などとは異なり、遠足と同様に子どもの視野を広げるための非日常的な保育活動として位置づけられているが（平岩・一盛, 1987)、全ての幼稚園・保育所において実施されているわけではなく（小林, 1987)、「行事の精選」の対象としてその必要性を検討すべき対象の1つであると考えられるためである（清水・岡嶋・米田, 2003)。

先行研究　だが、このような視点から、お泊り保育の意義について行われた実証的研究は数少ない。実際、日本保育学会第26回大会～第40回大会の研究発表において、お泊り保育の研究発表数を調べた谷田貝・村越・西方・鹿又（1988）によれば、お泊り保育に関する研究発表は、3971件中わずか26件（0.01%）に過ぎなかった。

では、数は少ないながらも、今までに実施されたお泊り保育に関する実証的研究からは、どのような知見が得られたのだろうか。峯・二宮（2003）は、お泊り保育の意義とその効果が子どもや親にどう受け止められているのかについて、保護者を対象に質問紙調査を行った。その結果、以下のことが示された。すなわち、(1)子どもが一番印象に残っていることは、キャンプファイヤー・仕掛け花火（75.6%)、仲間と泊まれたこと（49.6%）などであった。(2)お泊り保育後に親子で話題になった活動は、キャンプファイヤー（25.1%)、カレー作り（15.7%）などであった。(3)お泊り保育を通して子どもに期待することは、自信がついてほしい（74.8%)、仲間と深い関わりが持てるようになってほしい（67.7%）などであった。(4)実施前の不安については、親子とも不安はない（42.5%)、親が不安（24.4%)、子どもが不安（20.5%)、親子とも不安（12.6%）という結果であった。また、不安の内容については、親から離れて寝るのが不安だ（24.4%)、おねしょをするのが不安だ（15.0%）など、睡眠時の不安が多いことを彼らは指摘している。(5)親の子どもに対する評価では、一人で泊まることに自信がついた（44.1%)、たくましくなった（26.0%）などがあげられていた。なお、(6)友達との関係について変化があったとする回答は6.3%であったが、今後に期待すると答えた親は83.4%にも上っていた。

また、石崎・山内（1976）は、(1)お泊り保育中において親が心配することは、外泊や集団生活への適応（20.0%)、生活習慣（13.2%)、病気やけが・疲労（11.8%）などであること、(2)親がお泊り保育に期待することは、積極性・自立心・独立心（15.8%)、友人関係・（お泊り保育を）楽しむ（11.8%）などであったと報告している。

他の石崎らの一連の研究（石崎・山内・荻野, 1979；石崎・山内・中西, 1995）では、(1)お泊り保育中の親の心配については、非常に心配（6.2%、6.5%)、時々心配（64.6%、68.5%)、心配しなかった（25.7%、25.0%）であった（括弧内の前者は、石崎他（1979）の結果であり、後者は石崎他（1995）の結果である)。また、(2)お泊り保育中の子どもの様子をどのように想像しているかでは、元気にやっているだろう（47.0%、45.7%)、まあまあやっているだろう（46.1%、51.1%)、メソメソしているだろう（1.7%、3.3%)、(3)帰ってきた子どもの

[2]「おとまりほいく」には，「お泊り保育」，「お泊まり保育」，「泊まり保育」，「合宿保育」，「宿泊保育」というように，様々な呼び方がある。本研究では，調査にご協力頂いたA幼稚園の「お泊り保育」という表現を用いることにする。

様子は、いつもとかわりなかった（35.9%、23.1%）、やや疲れ気味のようであった（49.6%、58.2%）、ひどく疲れているようだった（2.6%、5.5%）、はしゃいで興奮しているようだった（12.0%、12.1%）、(4)お泊り保育についての子どもの話では、帰ってきてから進んで話してくれた（47.7%、53.5%）、思い出して話してくれた（29.0%、29.3%）、聞くと話してくれた（22.4%、15.2%）という結果であった。したがって、保護者はお泊り保育がはじまるまでは何かしらの不安を抱えているが、お泊り保育をむかえると、子どもはどうにかやっているだろうと考えているようであった。

また、清水他（2003）は、お泊り保育に参加した年長児の保護者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、「宿泊保育のことをよく話す」、「'またお泊まりしたい'と言う」という項目の得点が、5段階評定の真ん中の値である「3」（どちらでもない）よりも有意に高く、お泊り保育が子どもの園生活に何らかの変化を与える可能性が示唆された。

問題・意義　以上のことを整理すると、これまでに行われた研究からは、お泊り保育において子どもの印象に一番残っている出来事、お泊り保育に対する親の不安、お泊り保育に対して親が期待すること、などについてはその内容がある程度明らかになりつつあるといえる。ところが、ある園で行われているお泊り保育実践について、事前事後指導およびお泊り保育当日を含めた参加観察を行い、保育者、保護者、子どもという複数の視点から包括的にその特徴を捉え、その中からお泊り保育に特有の教育的意義を精査した研究はほとんどない。このような検討は、日常の保育や他の行事にはないお泊り保育の特徴を見出すという点において、また、現在は実施していないが今後お泊り保育を実施したいと考えている園に対して1つのモデルを提示するという点において重要である。

目的　そこで本研究の目的は、(1)お泊り保育を成功させるために行っている保育者の工夫、(2)お泊り保育当日の子どもの様子、保育者や参加観察者が考えるお泊り保育の意義、(3)保護者がお泊り保育に期待すること、および保護者の目から見たお泊り保育を経験することによって生じた子どもの変化、(4)子どもがお泊り保育で一番楽しかったこと、を明らかにすることであった。そのため、山口県にある私立A幼稚園（以下、A幼稚園とする）に協力を依頼し、お泊り保育に参加しながら観察研究、質問紙研究、インタビュー調査を行った（Figure 1）。具体的には、年中組保護者に対する事前説明会、うちわ作り（お泊り保育に関連する保育）、お泊り保育当日に参加し観察を行った。また、お泊り保育当日には、保育者や参加観察者に対して、インタビュー調査を実施した。そして、保護者に対して、お泊り保育の事前事後に質問紙調査を行った。さらに、お泊り保育で楽しかったこと・印象に残っていることについて、お泊り保育後に子どもたちに絵を描いてもらい、お話をしてもらった。

	6月下旬～（事前）	7月7日（当日）	～7月中旬（事後）
子ども	2. うちわ作り	3. お泊り保育当日の参加観察	5. 楽しかったこと・印象に残っていることを絵で表現してもらう
保護者	4. 質問紙調査（事前）		4. 質問紙調査（事後）
保育者	1. 年中組の保護者対象の事前説明会	3. インタビュー調査	

Figure 1 本研究の流れ（1～5は，研究1～5に対応している）

A幼稚園のお泊り保育の特徴・歴史　『A幼稚園の百年史』（100周年を記念して公刊されたA幼稚園の歴史についての文献）に基づくと、A幼稚園のお泊り保育には長い歴史があり、年中児も参加すること、保護者に手伝いをほとんど依頼しないこと、などが特徴的である。以下に、A幼稚園の百年史から抜粋したお泊り保育に関する記述を紹介する。

A幼稚園では、昭和59年からお泊り保育が取り入れられていた。対象児は年中児・年長児であった。プログラムは、スイカ割り、プール遊び、カレー作り・飯盒炊飯、夜店遊び、花火見学であり、2階のホールと研修室に分かれて皆で就寝する。年中児を参加させたのは、最初は人数が少ないからという消極的理由からだったが、年中児だからといって、ほとんど支障がなかったこと、子どもにとって初めての『外泊』は友達どうしの絆を深め、楽しい思い出とともに大きな自信と自立への一歩になり、その経験を幼稚園時代二回することはその効果をさらに大きくすることができる。そこで、人数が増えた今でも年中児の自由参加でお泊り保育を継続している（毎年ほとんどの年中児が参加）。保護者にお手伝いを依頼することがほとんどないのも園の特色である。

また、A幼稚園のお泊り保育のねらいは、「自信と自立心を育てる」、「共同生活の中で規則正しい生活をする」（食事・就寝・早起き・あいさつ等をきちんとする）、「日常の幼稚園生活では、お互いに発見できなかったものを確認する」、「一緒に寝泊まりすることによって一層先生や友だちとのつながりを深める」、「年長児にとって最後の夏の楽しい思い出をつくる」の5つであった。

研究1（事前説明会）

目的　A幼稚園の保育者が保護者の不安を軽減するために、具体的に何をしているのか、を観察し、明らかにする（e.g., 言葉掛け、例年のお泊り保育の様子をどのようにして伝えているのか）。

方法

調査対象　調査対象は、お泊り保育にはじめて参加する年中組の保護者を対象とした事前説明会において全体説明を行った主任保育者1名（保育職職歴26年）であった。なお、事前説明会に参加した年中組の保護者は25名であった（出席率77.8%）。

手続き　年中組保護者へのお泊り保育事前説明会（2007年6月15日）に参加し観察を行った。なお、A幼稚園では、年長組に対する全体説明会は実施されていない（前年度、子どもたちはお泊り保育に参加しているため）。

結果と考察

お泊り保育事前説明会では、主任保育者が、前年のお泊り保育のビデオを保護者に観せながら、その流れに沿って必要事項を説明していた（所要時間は約30分、Table 1）。全体的に、夜（就寝時）についての説明が多かった。また、

Table 1 年中組保護者対象お泊り保育事前説明会における主任保育者の説明

イベント	前年のお泊り保育の様子および主任保育者の説明
すいかわり	年中児の中には，すいかわりのときの目隠しを恐がる子がいる。また，すいかをたくさん食べる子，日頃から嫌いで食べない子，お泊まり保育の緊張によって食べられない子がいる。
野外炊飯	年中組が夕食のカレーを作っている間，年中組はプールで遊んでいる。そして，カレーができあがる頃にプールからあがるので，年中組はこの時間は基本的に遊んでいるだけである。年長組の女の子は野菜を切り，男の子は火をうちわで扇ぐ。カレーを食べられない子どもには，おにぎりが準備されている。なお，野外炊飯の後片付けをしている時間に，年長組はプールに入る。
着替え	子どもたちがもう一度同じ服を着ないように，着替えは分かりやすくしておく方がよい。
就寝時	他の活動は楽しんでいるが，毎年，就寝時が一番のネックになっている。しかし，寝てしまえば朝を迎えられる。普段，寝るときに持っているもの（ぬいぐるみやおもちゃ，など）を持ってきてよい。女の子は夜遅くまで起きて話をしているが，男の子は涙が出ることが多い。子どもたちは早朝5時頃に起きはじめる。
お迎え	子どものことが気になるためか，毎年，年中組の保護者の方が早めに迎えに来ている。
その他	肌の状態（アトピー，など）によっては，夜起こして着替えさせたり，就寝前にシャワーを浴びさせるなど，衛生面には気をつけている。また，何か気になることがある保護者には，後で個別に相談にのる旨が告げられていた。

説明会では「年中児には不安になること（夜、一人で寝ることや保護者が一緒でないこと、など）を言うと、『お泊り保育に参加したくない』と思うようになってしまうかもしれない。そのため、子どもたちには『こんな楽しいことがあるんだよ』と楽しいことだけを伝えていて、夜寝ることにはまだ触れていない」という説明がなされていた。これらのことから、親子共にお泊り保育における不安要素は、夜（就寝時）のことであると思われた。

また、主任保育者は「毎年、保護者の方は子どもを参加させるかどうかを2〜3日前まで悩むが、大体の子どもが参加している」ということを話していた。このことから、保護者はお泊り保育に対して多少の不安を持つが、お泊り保育に参加すること自体はよいことだと思うので悩んでいるという様子が伺える。

さらに、子どもたちには、はじめから不安になるようなことを言っていないため、年中組の子どもたちには、はじめから不安になる要素がないともいえる。そのため、保育者が不安を取り除こうとしているのは、もしかしたら保護者のみなのかもしれない。

研究2（うちわ作り）

目的　お泊り保育に関連した事前指導である「うちわ作り」に2日間参加し、年中組と年長組では、お泊り保育への盛り上げ方がどのように違うのかを観察する。

方法

調査対象　調査対象は、年中組とその担任保育者（研究1の主任保育者：保育職職歴26年）、年長組とその担任保育者（保育職職歴11年）であった。1日目は、年中組の男児17名と女児18名の計35名、年長組は男児16名と女児16名の計32名がうちわ作りに参加していた。また、2日目は、年中組の男児17名と女児19名の計36名、年長組は男児16名と女児16名の計32名がうちわ作りに参加していた。

手続き　2007年7月2日と7月3日に実施されたうちわ作りの様子をビデオカメラで撮影しながら参加観察した。

結果と考察

うちわ作りの保育実践の概略をTable 2に示す。年中組は、お泊り保育の話題をあまり出さずに、「夏だからうちわを作ろう」という導入から保育をはじめていた。年中組は、お泊り保育の話をすると不安になってしまう子どもがいるため、あえて、担任保育者は、あまり話題にしていなかったようである。また、お泊り保育の話題をしたとしても、「寂しくならないように宇宙人をいっぱい作ろう」や「お母さんの宇宙人を作ろう」など、お泊り保育で子どもが寂しくならないための工夫を行っていた。担任保育者の話によれば、お泊り保育当日になって、「（暑い時に）あっ、そういえば、うちわがあったから使おう」という感じで、子どもたちは今回製作したうちわを使うようである。

一方、年長組は、はじめからお泊り保育の話題を前面に出し、「お泊り保育の野外炊飯のためにうちわを作る」という導入の仕方であった。年長組は、昨年もお泊り保育を経験しており、今年は何をするのかを分かっているため、担任保育者からの問いかけにもスムーズに答えられていた。以上のことから、年中組と年長組とでは、お泊り保育に関連した事前指導において、保育の目的そのものが大きく違うということを読み取ることができよう。

研究3（お泊り保育当日の観察および保育者や参加観察者へのインタビュー）

目的　お泊り保育に参加し、子どもたちが楽しんでいる様子や不安がっている様子など、子どもたちの様子を観察する。加えて、お泊り保育1日目の夜に、A幼稚園園長、保育者、参加観察者6名にインタビューを行い、お泊り保育の意義・良さについて考察する。

方法

調査対象　お泊り保育参加者は、子どもにつ

Table 2 年中組，年長組のうちわ作りの様子

		年中組		年長組	
		先生の言葉掛け	子どもの様子	先生の言葉掛け	子どもの様子
七月二日	導入	「暑いでしょ」と，うちわを出して子どもたちを扇ぐ。数日前の雷の話。「雷はどこでなる？」	「雲の上」と答える。	「お泊り保育でおいしいカレーを作らないといけないね。おいしいカレーにするにはどうしたらいい？」	「心をこめて。味付けしたらいい」と口々に答える。
		「空の上には何がある？」と話す。	「雲，ウルトラマンの宇宙」と答える。	「女の子が野菜を切ってくれるけど，何を切るのかな？」	「たまねぎ，にんじん，じゃがいも，お肉」と口々に答える。
		宇宙の話をし，「宇宙に行くにはどうやっていく？」と尋ねる。	「ロケット」と答える。	「お肉はミンチを使うよ。みんなで切る練習をしてみよう」	みんなで切る練習をする。
		折り紙のロケットを見せる。		「男の子は何するのかな？」	「カレールーを鍋に入れる」と答える。
		ロケットの作り方を見せる。		「うちわはいつ使うの？」	「火をおこすとき」と答える。
		うちわを見せて，できたロケットと星をうちわに貼ることを説明する。		「女の子が野菜を切っている間，男の子は暑いけど火をおこすんだよね」，「お泊り保育が近づいてきたね。後何日？後5日よ。もうすぐよ。おいしいカレーを作るために，頑張ってうちわを作りましょう」	
	うちわ作り		折り紙でロケットを作る。できた子からうちわと赤いリボン（ロケットの火になる部分）をもらい，ロケットにつける。		子どもたちには，自分が好きな色のうちわが配られる。その後，みんなで，扇いでみる。
			うちわにロケットを貼る。その後，うちわに星を貼って飾る。	「うちわをお魚に変身させるにはどうしたらいい？」	「目，口，尾びれ」と口々に答える。
		うちわの裏側は次の日に作ることを伝える。	できたら，自分のシールを貼って，お道具箱になおす。	尾びれ，背びれ，胸びれをつける位置を確認し，尾びれの作り方を見せる。	尾びれ，背びれ，胸びれをつけたら目を描く。
七月三日	導入	「昨日お泊り保育の時のうちわを作ったよねえ」，「ロケットがヒューって飛んでいって何があった？」	「星，宇宙人」と答える。		うちわを配って，魚を見せ合う。
		「今日は宇宙人を作ります」と話し，おたより帳やシールで宇宙人を紹介する。	好きな形のシールを貼って，絵を描いて宇宙人にする。	昨日の活動を振り返り，今日の活動内容（シールを切って貼る，マーカーで模様を描く）を話す。	
	うちわ作り	「マーカーはよく見える色で描いてね。どんどん仲間を増やしたり，星のシールを貼ってね」			子どもは個々人で好きな色のシールを選び，飾っていく。
		「お泊り保育の時に寂しくならないようにいっぱいいっぱい作って。お母さんの宇宙人も作って」			
		「できたら，お道具箱に片付けてね。暑い人は扇いでみて」と言葉掛けをする。	お道具とゴミを片付けたら自由遊び。		できたら，頭の上にあげて魚を見せ合う。

いては、年長児32名（男児16名、女児16名）と年中児36名（男児17名、女児19名）の計68名であった。また、大人の参加者は、A幼稚園園長、A幼稚園保育者5名（保育職職歴6年、11年、11年、16年、26年）、B短期大学保育学科男性教員2名（内1名は第1著者）、ボランティア学生10名（B短期大学保育学科1年生5名、専攻科生5名［内1名は第2著者］、全て女性）であった。なお、専攻科生は全て幼稚園教諭二種免許状と保育士資格を取得済みの学生である。参加観察者は、このうち、B短期大学保育学科男性教員1名および専攻科生5名であった。

手続き　お泊り保育に参加し、お泊り保育の流れに沿ってビデオ撮影を行いながら、子どもたちの様子を観察した。

結果と考察

A幼稚園のお泊り保育の具体的な日程をFigure 2に示す。また、Figure 2にそって、お泊り保育中における参加観察の結果、およびA幼稚園の園長と保育者、そして参加観察者へのインタビュー調査結果をTable 3からTable 6に示す。

〈1日目〉	年　中	年　長
14:40	集合・挨拶　注意・お約束	
15:00	すいかわり　おやつ	
16:00	プール	夕食準備（野外炊飯）・カレー・ミニゼリー
	夕食	
18:00	自由遊び	プール
19:00	夕べの会　花火	
20:30	就寝準備	
21:00	就寝	

〈2日目〉	年中	年長
6:30	起床・洗面　着替え	
6:45	ラジオ体操　朝食準備	
7:00	朝食	
8:00	荷物整理	
8:30	おかえりの会	
8:40～9:00	降園	

Figure 2　A幼稚園のお泊り保育の流れ（2007年7月7日・8日）

登園時の様子から、予想以上に泣く子どもは少なく、保護者は子どものことを心配しているというよりも、自分自身が寂しくて子どもに声を掛けているのではないかという印象を受けた。保護者の中には、子どものことをとても心配している人もいた。だが、保育者に預ける際に泣いている子どもから離れてしまわないと、子どもが保護者から離れられなくなってしまうため、保護者はすぐに帰っていた（Table 3）。

お泊り保育がはじまってしまうと、登園時に泣いていた子どもも楽しく過ごせているようで、通常の保育とあまり変わらない様子であった（Table 3-5）。A幼稚園園長や参加観察者①が述べているように、次から次へと楽しいイベントが続くので寂しいことを忘れられているのかもしれない（Table 5, 6）。すいかわりや野外炊飯、夕べの会などは、夏という季節を楽しむためのイベントである。また、子どもたちは園舎に貼ってある日程表を常に気にしていたので、子どもたちにとってお泊り保育が特別な日であることが伺えた（Table 6）。就寝時には、寂しそうな子どもが何人かいたが、そういった子どもには保育者や参加観察者が付き添って寝かしつけていた。そのため、泣き出す子どもは少なかった（Table 4-6）。

2日目の朝は、事前指導で保育者が話していた通り（Table 1）、子どもたちの目覚めは早かった（Table 4）。緊張により目が覚めたこと、早く保護者に会いたくて目が覚めたこと、などがその理由として考えられる。また、就寝時に泣いていたＳくんも、無事に朝を迎えられて安心したのか「夜寂しくて泣いちゃった」と、明るく話していた。朝食時に、子どもたちが「今日は帰れる」と話していたことや、お迎えを待っているときにテラスを覗いていたこと、お迎えが来るとすぐに保護者の元へ向かったことから、保護者に会えることをとても楽しみにしていたと思われる。同時に、保護者もお迎えの時間になる前から門の前で待っていたり、次々と迎えに来ていたことから、早く子どもに会いたがっているという印象を受けた（Table 4）。

Table 3 お泊り保育中の様子（登園からカレー作りまで：表中の人数はそのような行動をした人の数である）

	年中	年長
登園	子どもが，先生と話す母親を5分程度呼び続ける。	母親が「がんばって」という思いをこめて抱きしめる。
	子どもは友達が集まってくると保育室に入って遊ぶ。	子どもが先に走って来て，後から親が荷物を持ってくる：4組
	子どもが保育室で遊んでいるにもかかわらず，外で子どもの様子を約13分見守っている母親がいた。	上がり口のところに金魚の水風船（ヨーヨー）があり，年長児は全体的に金魚の水風船の方に目線がいっていた。
	保育室をのぞいて，「じゃあね」と声をかける親：2人	母親は，子どもが保育室で遊んでいるとき，その部屋の様子を見てはいるが，他の母親たちが帰ると一緒に帰る。長い人で約2分程度子どもを見ていた：2人
	母親が帰ると泣く男児：2人。この2人は，先生に抱かれて，保育室に入った。	他の保護者は，先生に挨拶をして，子どもが保育室の中に入るとすんなりと帰っていた。
		子どもが保育室で遊んでいるところに「頑張って」，「じゃあね」，「仲良くね」など最後に一声かける親：6人
		園に入りたがらないMちゃん。3分後，友達に誘われて入る。母親は1分半程度中の様子を見て帰ろうとするが，母親が門のところまで行ったとき，Mちゃんが「お母さん」と呼び，泣きながら抱きつく。気づいた保育者が抱いて母親と離す。それを見た母親はすぐに帰る。その後，すぐ保育室でお集まりがあったので，ボランティア学生がつく。周りの子どもたちも「どうしたの？寂しいの？」と，声を掛けて心配する。
はじまりの会	保育者の問いかけに，子どもたちは元気よく返事をしていた。また，お約束の中に「幼稚園の先生とか，お姉ちゃん先生はお母さんの代わりだから，甘えてもいいよ」と子どもが不安や寂しさを感じないように配慮する言葉がけがあった。	
		Mちゃんは，はじめは手を挙げないが，だんだん元気に手を挙げるようになっていった。
すいかわり	通常の保育と変わらない様子。待っている間は応援し合い，すいかに新聞紙製の棒が当たると喜ぶ。	
	すいかを食べるとき，「〇〇くん食べよう」と友達に声をかける男児がいた。種を園庭に捨てたので，「すいかがたくさんできるね」と嬉しそうに話す女児がいた。	すいかが嫌いだけど，がんばって，一口だけ食べていた男児がいた。Mちゃんは，すっかり元気になって，すいかが「〇〇の味になった」と参加観察者の持つビデオカメラに向かって話しかけてきた。
カレー作り	＜年中児は，この時間，プール＞ ・プールがお風呂の代わりだということを子どもたちは分かっていた。 ・プールも普段と変わらず，普通に遊んでいるという感じであった。 ・お風呂の代わりといっても，あまりお風呂らしいことはしていなかった。 ・風邪気味などで入れない子は，寝る前にシャワーを浴びるらしい。 →年中組は，プールが終わると，うちわをもって火を扇ぎにいった。	＜野菜切り＞はじめはうれしそうに跳んだり跳ねたりして，子どもたちはテンションが高いが，切りはじめるとそこには一種の緊張感があった。じゃがいも・にんじんに分かれて切り，たまねぎは後から全員で切る。プールに入れない年中組の女児に年長組の女児が「こっちにおいで」と手招きしていた。約20分で，野菜を全て切り終わった。
		＜火おこし＞はじめは一生懸命うちわで扇ぐ。約9分後，野菜を切り終わった女児たちが火おこしの様子を見に来る。その10分後，周りで遊んでいる女児を見て，年長組の半分程度の男児が遊びにいってしまう。残った男児たちは，「みんながおらんくなったからね，頑張ろう」と話していた。 火が強くなったのを見て男児が叫ぶ。それを聞いて，遊びにいっていた男児たちが戻ってきて扇ぎはじめる。周りが遊んでいても，火を扇ぎ続ける子は5人のみ，他の子は気が向いたら扇ぎにくるという感じであった。
		＜カレールーを一人ずつ鍋に投下する＞みんな入れたいようで，先生の周りに集まる。はじめは高い位置から投げ入れていたが，先生に指示されて，だんだん鍋の近くからゆっくりと入れられるようになっていった。並んで待っていても，カレーの鍋を見ていたいようで，徐々に列が鍋を囲むようになった。全部入れ終わった後でも，「ぼく，何回入れた」，「まだやりたいな」とうれしそうに話していた。
食事	カレーの話（にんじん食べてる？おかわりできる？など）を全体でしていた。	先生が「野菜は女の子が切ってくれたから，きれいに食べてね」と声掛けをしていた。

Table 4 お泊り保育中の様子（夕べの会から降園まで：表中の人数はそのような行動をした人の数である）

	年中	年長
夕べの会	＜わたがし＞常に10人程度の列ができる。わたがしをもらうときは，みんなとてもうれしそうな顔だった。ヨーヨー釣りが終わり，ヨーヨーを持っている子は，待っているときにヨーヨーで遊びながら並んでいた。	
	＜ミニジュース＞列ができることは少なく（あまり人気がなく），列は多くて3人だった。	
	＜ヨーヨー釣り＞上手に釣れたことを喜んでいた。	
	＜スーパーボール：ドラゴンボールのようにボールの中に星が入っている＞「ぼく，○個星がある」と，スーパーボールの中にある星の数のことを友達と話す。	
花火	怖い子は園舎から見る。	
	「キレイだね」と見ながら歓声があがるが，少し怖いようで「怖い，怖い」としがみつく男児4人あり。	Mちゃんは，怖くて担任に抱かれて花火を見ていた。
就寝準備	周りの子が寝るときに持つぬいぐるみを見て，「忘れてしまった」と男児が泣き出すが，先生に「先生が一緒に寝てあげる」と言われると，泣き止む。	Mちゃんは，先生のお話（着替えの手順を話す）の時には不安そうな表情になるが，ボランティア学生と一緒に着替えをしていると，徐々に笑顔で話せるようになった。
	Rくんはさっさと上靴を片付けて，寝る準備をする。その後はビデオを見て遊ぶ。	Mちゃんを含む女児４人がかたまって「一緒に寝よう？」と話していた。
就寝	電気を消すと，「きゃー」という声があがる。	
	寝る直前まで幼稚園に泊まるということを知らなかったため，Sくんは泣いてしまう。	はじめ，お布団の敷いてある部屋に行くと，一面に布団が敷いてあったため，走り回っていた（消灯前）。
	持ってきたぬいぐるみに小さくなったお母さんが入っていると話す女児がいた。	Mちゃんはなかなか布団につこうとしないし，ごそごそしてなかなか寝付けない。ボランティア学生が隣に行き，ようやく横になった。
起床	子どもたちは，5時半頃から起きはじめた。周りの子がごそごそすると，どんどん目が覚めて，5時30分頃から4～5人の話し声がし，その後，たくさんの子が立ち上がった。5時45分にはほとんどの子が起きていて，6時まで寝ていたのは4人（年中児の女児3人，男児1人）だけだった。起きたとき，子どもたちは「帰れる」，「お母さんに会える」と帰るのを楽しみにしているようだった。男児はヨーヨーやスーパーボールを持っている子が10人以上いた。女児は順番に先生に髪を結ってもらっていた。	
	Rくんは，お泊り保育がはじまったときはあまり友達とも話をしていなかったし，緊張しているようだったが，2日目を迎えてほっとしたのか，ビデオカメラに話しかけたり，ビデオカメラを「こっちに見せて」と話しかけに来ることが多くなった。	女児はピアノで遊んでいた。
終わりの会	園長先生が「楽しかった人？何が一番楽しかった？」と尋ねると，子どもたちは口々に答えていた。「もう一日泊まりたい人？」という質問に全体の3分の2程度の子が手を挙げ，「お家に帰りたい人？」という質問には3分の1程度の子が手を挙げていた。また，先生のお話の中に「お兄ちゃん・お姉ちゃんになったね」という言葉掛けがあった。	
		年長組担任保育者が子どもたちに楽しかったことを聞いたところ，すいかわり（5人），カレー作り（10人），カレーを食べたこと（8人），お祭り（夕べの会）（19人），花火（22人），プール（18人），夜（18人［内，違うと手を隠す子が1人］），全部楽しかった（全員）となっていた（複数回答）。
降園	門の前で降園の時間になるのを待っていたのは，7家族であった。再会時には，子どもも保護者もうれしそうだった。保護者は子どもに早く会いたいようで，保育室の中を覗いたりしていた。また，どの家庭も「頑張ったね」と子どもの頭をなでたりしてほめている。登園時はすんなり帰れなかった保護者や，すんなり離れられずに泣いてしまった子どもも，お帰りの際には，先生に「さようなら」をすると，すぐに帰っていた。保育室で待っている子どもたちも「来たかな？来たかな？」という感じで，外を覗いたり，テラスに出たりする。荷物を持ったまま待ちわびている子もいる。そして，お迎えが来ると走って荷物を取りに行く。ほとんどの子どもが夕べの会のヨーヨーやスーパーボールを保護者に見せていた。	
	登園時に遅くまで残っていた母親は，お迎えが早かった。子どもと再会すると，先生方やボランティア学生に丁寧にお礼を言ってすぐに帰っていった。	Mちゃんは，登園時には元気がなかったが，降園時に（母親に会えてから）は，とても元気になった。
	はじめのお迎えから5分もすると，テラスの前にお迎え待ちの列が7家族分ができていた。最初と最後のお迎えでは23分の差があった。	多くの子が保護者に荷物を持ってもらう中，父親が荷物を持ってあげようとすると，「自分で持つ」と言う男児がいた。最初と最後のお迎えでは19分の差があった。

Table 5 A幼稚園園長および保育者へのインタビュー結果

園長先生		保育者
お泊り保育をはじめた昭和59年当時は，年長・年中児合わせて20人程度の子どもが参加していた。	主任保育者（職歴二十六年）	年中児では，泣くだろうと予想していた子が泣いた。また，日にちが近づくと，「お泊り保育，行きたくない」という子もいた。不安な子は，お母さんとの連絡をよくとるようにしている。
お泊り保育をやり始めたきっかけは他の園でやっていると聞いたからだった。		一番不安なことは泊まることなので，そのことは言わずに，わたがしが食べられるとか，楽しいことを話し，楽しいことに気がいくようにしている。
夕食のメニューは，カレーでなく，やきそばの時もあったが，子どもが好きだからカレーに定着した。		年中児のうちわ作りも夏のイベント（暑いからうちわを作ろう）という感じで，お泊り保育だから作ろうと設定するわけではない。「ちょうどお泊り保育もあったね」という感じで使用する。
30年間やってきて，はじめの頃は「帰りたい。帰りたい」と泣く子が多かったが，最近は子ども自身がクールになっているため，泣く子が少なくなったと感じる。	保育者①（職歴十六年）	Sくんはさっきまで「幼稚園で寝る」ということを知らなかった。
普通なら親から離れたくないという思いが強いはずだが，子ども同士の（泊まることに対する）期待・楽しみが強いので，1日くらい親から離れても大丈夫。		疲れてるけど，寝るときに寂しくなって，なかなか寝つけない子は，「今日楽しかったね。〇〇〇（イベント名）したね」と楽しい話に持って行き，寂しい気持ちから離れるようにして寝かせている。
自由参加なのに，ほぼ全員が参加するのは，親も参加させたいからであり，親が不安だったら参加させない。		年中児ははじめてなので，（保護者の性格もあるが）保護者の方が心配で帰れない。
プログラムは，子どもたちに家のことを忘れさせて，楽しいことを次々にさせるようなプログラムに，意図的にしている。		今年は，虫さされとか，風邪薬とか，吸入とか，薬は，年中児の方が多かった。年長児は4人のみ。
子どもたちを楽しませるイベントとして，思い出作りとして，お泊り保育では，いつもの園生活とは変化をつけている。	保育者②（職歴六年）	お泊り保育の前に幼稚園バスの中で，年少児も年中児も年長児もいる前で，「もうすぐお泊り保育だね。先生，ヨーヨー屋さんやるから来てくれる？」と話す。きっと来年には忘れているだろうけど，年少児にも，「楽しいことをやるんだ」ということを話す。その時には，「行きたくない」と言っていた年中児も「ヨーヨー屋さん行くからね」と気持ちがこっちに向いてきて，楽しみにしていた。
他の行事も同じだが，お泊り保育をすることで友達関係が深まったり，自信がつく。行事を通して子どもたちを育て，自信をつけさせる。ただし，それぞれの行事でつく自信は，種類が違う。		自然に子どもたちからお泊り保育の話題になるので，気持ちをもっと盛り上げて当日を迎えるようにしている。
リスクもあるが，それを怖がったら何もできないので，むしろ成果を期待して行う。		子どもたちは楽しみにしているからテンションが高い。しかし，逆に危険が起こりやすいので，注意している
お泊り保育は天気が安定していて暑い時期に行うのがいい。以前は，夏休み中にしていた。	保育者（全体）	プールとか自由遊びの様子は年長児も年中児も普段と変わらない。

Table 6 参加観察者へのインタビュー結果

登園時	参加観察者①	卒園児のお兄ちゃんやお姉ちゃんが一緒に来る子は落ち着いていた。保育者が年中児が持ってきているものを「かわいいね」と言葉掛けをすることで，うまくお泊り保育に入っていけると思った。また，年中児は，大きい荷物を持って行ける自信と，その荷物を持ってきょろきょろする不安があると感じた。
	参加観察者②	年中組は保護者と子どもと先生で話すが，年長組は保護者同士が話していた。年長組はお母さんを振り返らずにどんどん先に行っていた。
	参加観察者③	名残惜しそうな子どもがいて，母親は子どもが泣く前に行かないとっていう感じだった。その後，その子どもはしばらく一人でいた。また，子どもが先に園舎に入って，外から呼んでも気付いてもらえない母親は残念そうにしていた。
	参加観察者④	子どもはさっぱりと行っても，お母さんの方が「ばいばい」と子どもが返事をするまで声をかけていた。
就寝時	参加観察者③	子どもたちは，なかなか寝付かなかった（人形がないと眠れない子，いつもと環境が違うため眠れない子が多かった［就寝時間から1時間経っても眠れない子もいた］，いつもの豆電球だったら眠れる子，みんなの咳で眠れない子，お泊り保育だから眠れない子，お母さんがいなくて寂しくて眠れない子，など）。また，寝るときに泣きそうな子がいて，近くにいた別の子が「ママがいないと寝れんの？」と話しかけ，その子は泣くのを我慢していたが，その言葉で泣き出してしまった。
	参加観察者⑥	一人トイレに行くと，みんなが行く（トイレに行きたくない子も）。
Mちゃん	参加観察者④	Mちゃんは「ママがいい」と寝るときにぐずる。その子の隣にいた年長組のAくんも「ママに会いたいなあ」とごそごそしていた。その後も「幼稚園の先生がいいなあ」という。Aくんは，寝る前は本当に寂しそうだったが，園の先生がくると寝た。
	参加観察者⑤	Mちゃんは遊ぶときにはしっかり者で，移動のときもみんなより先に行っていた。
	参加観察者⑥	Mちゃんはうちわ作りのときに，尾びれはできるが，背びれと胸びれが貼れなくて，「できない」と言っていた。
Sくん	参加観察者⑤	Sくんはすごくマイペースで，寂しい感じではないが，あまり友達といない。フシギダネとプーさんのタオルやブランケットを持っていて，寝る前もずっと話していた（どうしても寝れない。いつも寝るときや，起きるときはこうしてる。フシギダネに話しかけたり，フシギダネのことを話してくれる。他の先生はどこにいるのか，帰ったのか，いつも幼稚園に寝ているのか，など）。そして，だんだん明日のお迎えのことや，お母さんの話題になり，泣き出した。
全体について	参加観察者①	お泊り保育を宿泊と思っていなく，すいかわりなどのイベントに意識がいっている。スケジュールやイベントのテンポがよく，間がないので，どんどん楽しいことが起きる。すいかわりの目隠しは不安なことなのに，「導入」なので，乗り切れたらその後が大丈夫になっていた。プログラムにテンポ良くのっていけない子（風邪だからプールに入れない，など）は，その不安（プールに入れないからどうしよう）も加わっていたようだ。一人でいることが多い子（泣いていた子）は，他の子に話しかけても関心を持ってもらえなかったりし，それで不安になっていた（そして泣いていた）。年中児は，年長児に比べて言葉の発達が追いついていないから，コミュニケーションがとれにくそうだった。だから，テンポ良くいかなくなる「わたがし」での待ち時間など，列の後ろの方の子は話が少なかった。子どもの不安を感じているからか，明らかに不安がっている年中組の保護者がいた。しかし，年長組は保護者同士で話せているから，そんなに不安そうではなかった。年中組は，ほとんどの子がぬいぐるみをもってきていたが，年長組はもってきている子は少なかった。日頃から子どもたちと保育者の関係を豊かにしておくことがお泊り保育という大きな山を超えられることにつながると感じた。
	参加観察者③，④	抱っこしてが多かった。
	参加観察者④	「幼稚園に泊まるからうれしいなあ」と，楽しみにしている子がいた。
	参加観察者⑤	保育中は，お泊り保育の日程を確認しにいったり，流れが頭の中に入っている子が多かった。
	参加観察者⑥	「お泊り保育，イヤ！」と先生に言いながら，先生が残念そうに反応してくれるやり取りを楽しんでいる子もいた。また，すいかを食べ終わった後や，自由遊びの時に一人だった子がいて，「一緒に遊ぼう」と，声を掛けるが反応はなかった。しかし，帰る前には，友達の手を引いて，一緒に遊んでいた。

研究4（事前事後の質問紙調査）

目的　研究4の目的は、お泊り保育に対する不安や期待、そして保護者の目から見たお泊り保育を経験することによって生じる子どもの変化の実態を把握し、それらが、年中組や年長組といったクラス、子どもの性別、そして出生順位（第一子かどうか）によって異なるかどうかを明らかにすることであった。

方法

調査対象　調査対象は、年中組母親32名（平均年齢35.8歳）、年長組母親30名（平均年齢34.5歳）であった。

質問紙　事前・事後調査で用いた質問紙は、フェイスシート、お泊り保育期待尺度、母親の分離意識尺度、お泊り保育変化尺度などから構成されていた。本研究では、このうち、フェイスシート、お泊り保育期待尺度、お泊り保育変化尺度について、調査結果を報告する。フェイスシートとお泊り保育期待尺度は事前調査で実施し、お泊り保育変化尺度は事後調査で実施した。お泊り保育期待尺度とお泊り保育変化尺度は、峯・二宮（2003）、A幼稚園の指導計画を参考にして、本研究で作成したものである。

フェイスシート　フェイスシートは、保護者の年齢・性別、お泊り保育に参加するのは第何子か、参加する子どものクラス・年齢・性別、自身がお泊り保育に際して感じている不安の程度（1＝「全く不安を感じていない」から7＝「非常に強く不安を感じている」）、子どもがお泊り保育に際して感じている不安の程度（評定値は同上）、子どもがお泊り保育を楽しみにしている程度（1＝「全く楽しみにしていない」から7＝「非常に楽しみにしている」）であった。

お泊り保育期待尺度　保護者がお泊り保育に対して何を期待するのかを明らかにするための尺度である。この尺度は、13項目から構成されており、7件法（1＝「全く期待しない」から7＝「非常に強く期待する」）で評定を求めた（項目例は、Table 7左側）。

お泊り保育変化尺度　お泊り保育変化尺度は、お泊り保育を経験することによって、子どもたちにどのような変化が表れたのかを捉えるための尺度である。この尺度は、15項目から構成されており、7件法（－3＝「かなりできなくなった」から3＝「かなりできるようになった」）で評定を求めた（項目例は、Table 7右側）。

結果と考察

フェイスシート、お泊り保育期待尺度、お泊り保育変化尺度の記述統計量をTable 7に示す。なお、お泊り保育期待尺度とお泊り保育変化尺度については、これらの尺度に対して因子分析あるいは主成分分析を行うと、それぞれ1因子（あるいは1成分）に集約されるが、本研究ではこれらの要素をより詳細にみるために、あえて各項目について分析を行う。

フェイスシートについては、「a. あなたが感じている不安の程度」は、「b. お子様が感じている不安の程度」との間にr=.61（p<.01）、「c. お子様が楽しみにしている程度」との間にr=－.25（p<.05）の相関があった。また、「b. お子様が感じている不安の程度」と「c. お子様が楽しみにしている程度」との間の相関はr=－.63（p<.01）であった。したがって、母親がお泊り保育を不安に思えば思うほど、子どもも不安になりそしてお泊り保育を楽しみにできない可能性があることが示唆された。

フェイスシートとお泊り保育変化尺度との間の関連については、「a. あなたが感じている不安の程度」や「b. お子様が感じている不安の程度」は、お泊り保育変化尺度との間に有意な相関がなかった。だが、「c. お子様が楽しみにしている程度」は、「7. 普段ではできない体験ができること」との間にr=.30（p<.05）、「9. 日常の園生活では発見できなかったことを見つけること」との間にr=.34（p<.01）、「10. 先生や友だちとのつながりを深めること」との間にr=.30（p<.05）、「11. 楽しい思い出を作ること」との間にr=.40（p<.01）の相関があった。したがって、お泊り保育においては、保護者や子どもの不安を取り除くことは勿論重要であるが、

Table 7 フェイスシート，お泊り保育期待尺度，お泊り保育変化尺度の平均値（標準偏差）[1)]

事　前	年中児	年長児
○フェイスシート		
a. あなた（母親）が感じている不安の程度	3.03 (1.82)	2.00 (1.11)
b. お子様が感じている不安の程度	3.03 (1.82)	2.37 (1.30)
c. お子様が楽しみにしている程度	6.00 (1.39)	6.17 (1.39)
○お泊り保育期待尺度		
1. 自信がつくこと	5.47 (1.29)	5.59 (1.02)
2. 友だちの輪が広がること	5.62 (1.16)	5.41 (1.05)
3. 協調性が身につくこと	5.65 (1.35)	5.69 (1.11)
4. 責任感が身につくこと	5.21 (1.39)	5.52 (1.18)
5. 自分のことは自分でしようとすること	5.59 (1.48)	6.07 (0.80)
6. 新たなことに挑戦できるようになること	5.68 (1.15)	5.90 (0.94)
7. 普段ではできない体験ができること	6.32 (1.27)	6.55 (0.63)
8. 規則正しい生活ができるようになること	4.88 (1.43)	5.00 (1.02)
9. 日常の園生活では発見できなかったことを見つけること	5.74 (1.36)	6.00 (0.96)
10. 先生や友だちとのつながりを深めること	5.85 (1.40)	6.07 (1.00)
11. 楽しい思い出を作ること	6.41 (1.26)	6.71 (0.46)
12. 夜，一人で寝ることができるようになること	4.59 (1.76)	4.36 (1.06)
13. お子様が親離れできるようになること	4.12 (1.84)	4.29 (1.33)

事　後	年中児	年長児
○お泊り保育変化尺度		
1. 自信を持つこと	0.89 (0.83)	0.71 (0.86)
2. 友だちの輪を広げること	0.57 (0.63)	0.67 (0.92)
3. 協調性を持つこと	0.43 (0.57)	0.54 (0.72)
4. 責任感を持つこと	0.61 (0.83)	0.79 (0.78)
5. 自分のことは自分でしようとすること	0.86 (0.97)	0.92 (0.93)
6. 新たなことに挑戦しようとすること	0.71 (0.85)	0.88 (0.99)
7. 大人に甘えること	0.25 (0.59)	0.38 (0.77)
8. 我慢強く辛抱すること	0.26 (0.53)	0.33 (0.70)
9. 自発的に取り組むこと	0.46 (0.69)	0.58 (0.72)
10. 先生や友だちとのつながりを深めること	0.57 (0.74)	0.79 (0.83)
11. 夜，一人で寝ること	0.14 (0.80)	0.88 (1.08)
12. お子様の親離れ	0.04 (0.69)	0.58 (0.97)
13. 規則正しい生活	0.11 (0.50)	0.46 (0.88)
14. 友だちのよいところを新たに発見すること	0.29 (0.46)	0.38 (0.49)
15. たくましくなること	0.81 (0.74)	0.83 (0.76)

[1)] 教示は次の通りであった。すなわち，フェイスシートは「今回お泊まり保育に参加することについて，あなたおよび参加されるお子様はどのくらい不安を感じていますか。また，お子様はお泊まり保育をどのくらい楽しみにしていますか」，お泊り保育期待尺度は「お泊まり保育を通して，お子様に期待することは何ですか」，お泊り保育変化尺度は「お泊まり保育を経験して，お子様に変化は見られましたか」であった。

それに加えて、子どもがお泊り保育を楽しみにするということもまた重要であることが示唆された。なお、フェイスシートとお泊り保育変化尺度との間の関連については、「あなたが感じている不安の程度」と「5. 自分のことは自分でしようとすること」との間にr=.36（p<.01）の相関が見出せるのみであった。

フェイスシート、お泊り保育期待尺度　フェイスシートとお泊り保育期待尺度の各尺度得点に対して、2（クラス：年中、年長）×2（性別：男児、女児）の二要因分散分析を行った（二要因とも対象者間要因）。その結果、「a. お泊り保育に対して親が感じている不安の程度」では、クラスの主効果が有意であった（$F(1, 60)=6.98$, $p<.05$）。つまり、年中組の親（M=3.03）は、年長組の親（M=2.00）に比べて、より不安を感じていた。このことは、年長組の親は昨年もお泊り保育を経験しているので、不安の程度が低くなったと考えられる。ただし、年中組の親の不安が高いといっても、7段階で約「3」

程度であり、不安は予想以上に低い。これは、保育者が親の不安を取り除こうとした成果ではないだろうか(Table 1など)。

先程と同様の尺度について、2（クラス）×2（出生順位：第一子、第二子以降）の二要因分散分析を行った（二要因とも対象者間要因）。その結果、「a. お泊り保育に対して親が感じている不安の程度」では、クラスの主効果が有意であった（$F(1, 60)=7.29$, $p<.01$）。また、子どもがお泊り保育を楽しみにしている程度では、出生順位の主効果が有意であった（$F(1, 60)=9.05$, $p<.01$）。つまり、第二子以降の子ども（$M=6.64$）は、第一子（$M=5.64$）に比べて、お泊り保育をより楽しみにしていた。このことは、第二子以降の場合は、お兄ちゃん・お姉ちゃんからお泊り保育の話を聞くことができるので、「お泊り保育は楽しいものなんだ」と捉えることができるためなのかもしれない。

お泊り保育変化尺度　お泊り保育変化尺度の各項目の尺度得点に対して、2（クラス：年中、年長）×2（性別：男児、女児）の二要因分散分析を行った。その結果、「1. お泊り保育によって自信がついたかどうか」、「6. 新たなことに挑戦しようとするようになったかどうか」、「10. 先生や友だちとのつながりを深めることができたかどうか」では、性別の主効果が有意であった（それぞれ、$F(1, 48)=8.45$, $p<.01$; $F(1, 48)=6.42$, $p<.05$; $F(1, 48)=8.33$, $p<.01$）。つまり、女児（$M=1.12$）は、男児（$M=0.52$）に比べて、お泊り保育を経験したことでより自信がついていた。加えて、女児（$M=1.04$）は、男児（$M=0.52$）に比べて、お泊り保育を経験したことでより新たなことに挑戦しようとするようになっていた。また、女児（$M=0.96$）は、男児（$M=0.41$）に比べて、先生や友達とのつながりを深めることができたようであった。以上の結果から、女児は男児に比べてより目に見えてわかるような大きな変化が得られやすいことが示唆された。このことは、年中組対象の事前説明会における主任保育者の説明（Table 1）とも合致する。

この他に、「11. 夜一人で寝ること」や「12. 親離れができるようになること」では、クラスの主効果が有意であった（それぞれ、$F(1, 48)=7.60$, $p<.01$; $F(1, 48)=6.03$, $p<.05$）。つまり、年長組（$M=0.88$）は、年中組（$M=0.14$）に比べて、夜一人で寝ることができるようになっていた。また、年長組（$M=0.58$）は、年中組（$M=0.04$）に比べて、親離れができるようになっていた。このように、年中組に比べて年長組において変化が見られたのは、年長組は昨年もお泊り保育を経験しているので、今年はお泊り保育に対して不安が少なかった上に、カレー作りでは役割があったためであろう。

研究5（子どもにとって一番楽しかったこと、思い出）

目的　研究5の目的は、子どもがお泊り保育で一番楽しかったことを調べることであった。その際には、親からの間接的情報ではなく、子ども自身に絵を描いてもらい、その絵についてお話をしてもらうという形で、直接的に情報を集めた。

方法

調査対象　調査対象はお泊り保育に参加したA幼稚園の年長児28名（男児13名、女児15名）と年中児33名（男児17名、女児16名）の計61名であった。

手続き　2007年7月11日に調査を実施した。まず、お泊り保育で楽しかったことを子どもたちと一緒に思い出し、次に楽しかったことを思い出しながら絵を描いてもらった。最後に、絵が描けた子どもから順番に別室にて描いた絵についてお話をしてもらった。また、お話をしてもらう際には、名前、イベント名、活動内容について答えてもらった。

結果と考察

個別インタビュー結果をTable 8に示す。Table 8から以下のことが示唆された。すなわち、年長組は、28人中22人が花火の絵を描き、花火のみを描いたのは19人で、お祭りなどを

一緒に描いた子は3人であった。女児は4人がカレー作りを描き、他の子どもは夜のイベント（お祭り、花火）のことを描いている。このことから、夜のイベントが子どもたちにとってはとても楽しかったことが示唆された。また、この結果は、Table 4の「終わりの会」における年長組担任保育者のインタビュー結果とも一致していた。

一方、年中組は、1つのものを描くというよりも覚えているもの（すいかわりと夕べの会と花火など）をたくさん描いた子どもが多かった。このことは、4歳半前後の「かく」活動の発達段階として、「配列に関連性がなく、自己中心的で、対象物とのつながりは感情的、興味的で、自分の知っていることだけ表現する」という、花篤・岡田（1994）の考察と一致する。つまり、思いついたことをどんどん描くという子どもの様子が伺えた。

Table 8 お泊り保育において子どもたちが楽しかったイベント

イベント	年中児	年長児
花火	11	19
夕べの会とすいかわり	6	0
花火と夕べの会	5	1
花火と夕べの会とカレー	4	0
カレー	0	4
夕べの会	1	2
花火とすいかわりと夕べの会	1	2
すいかわり	1	0
花火とすいかわり	1	0
夕べの会とカレー	1	0
花火と夕べの会と寝るとき	1	0
その他	1	0
計	33	28

まとめおよび総合考察

研究1から5の結果を整理すると次のようになる。すなわち、年中組の保護者にはお泊り保育に際してある程度の不安を抱えている人もいるが、事前説明会や保育者と連絡を取り合うことでその不安は軽減されていた。また、年中組の保育者は、子どもたちが不安にならないように楽しい話題を中心とした盛り上げ方をしているが、年長組の保育者は、子どもたちが昨年度お泊り保育を経験していること、カレー作りなどの仕事があることを中心にお泊り保育を楽しみにするような盛り上げ方をしていた。

当日になると、子どもたちの気持ちは高ぶり、お泊り保育を楽しんでいるようであった。中には、登園時や就寝時に泣いてしまう子どももいたが、保育者の対応によってそれらの子どもは落ち着きを取り戻していた。また、子どもだけでなく、保護者も寂しがっているということが明らかにされた。保育者や参加観察者へのインタビューでは、お泊り保育の背景や気をつけていること、意義が明らかになった。

お泊り保育変化尺度で、多くの項目がプラスの方向への変化として母親に知覚されていたが、その変化量は必ずしも大きくはなかった(Table 7)。これはお泊り保育という1つの行事で子どもに劇的変化が現れるというよりも、様々な行事が積み重なることで、1年を通して大きな変化が現れるためかもしれない。

「子どもたちにとって楽しかったこと」では、夜に関することが多かったが、年中児は夜のことを含む複数のことを描いている子どもも多かった。このことから、お泊り保育では、普段の園生活にはない時間帯のイベントが、子どもたちに特に楽しい思い出となったことが伺える。また、お泊り保育は非日常的な行事であるが（平岩・一盛, 1987)、夜の不安は大きく、その分、子どもたちにとって夜のことが思い出に残るのではないだろうか。つまり、お泊り保育には善玉ストレス的要素（良い意味でのドキドキ）があると考えられる。

以上のことから、我々は日頃の園生活にない夜の活動を伴ったお泊り保育には、一定の教育的価値があると考えた。特に、お泊り保育は、非日常的な経験（親と離れて友達と寝る、野外炊飯、など）ができ、今後の園生活に向けて、友達や保育者とのつながりを楽しい思い出とともに広げるという効果があるのではないだろうか。このことは、親子の不安を軽減するという保育者の工夫があってはじめて、成り立つことであろう。

本研究では、お泊り保育の研究を様々な視点から行ってきたが、園内型のお泊り保育についてしか触れていない。お泊り保育には、園内型の他に、園舎ではなく、他の宿泊施設（合宿施設）などで行う園外型や、障がい児療育型などもある。今後は、これらのタイプのお泊り保育との比較・検討も必要であろう。

この方向での試みとして、我々は、山口県にあるスポーツ・クラブC館で行われている障がい児療育型のお泊り保育（参加者は、23名［内、障がい児12名］、年少から小学校6年生）にも参加した。そこでの観察を通して、以下のことに気がついた。すなわち、A幼稚園はお泊り保育のみでなく、年間の行事を通じて、子どもたちの成長を確認するのに対して、C館の障がい児療育では、年間の成長をお泊り保育で確認していた。すなわち、お泊り保育を日常生活へと活かすという方向性だけでなく、日常生活での成果をお泊り保育で確認する（そして、来年のお泊り保育に向けて目標を立てる）という方向性もまた重要なのである。このように、お泊り保育と通常保育や園の教育目標との関連について研究することも、今後の課題である。

引用文献

平岩定法・一盛久子（1987）．行事と保育　青木一・深谷鋤作・土方康夫・秋葉英則（編）保育幼児教育体系　第2巻第4号　活動領域の指導　行事・集団づくり・実践記録　労働旬報社　p. 3-39.

石崎　龍・山内昭道（1976）．幼児合宿保育の実践的研究　日本保育学会第29回大会発表論文集, 107.

石崎　韶・山内昭道・荻野宏喜（1979）．合宿保育の実践的研究 Ⅳ――(2) 親の意識――日本保育学会第32回大会発表論文集, 236-237.

石崎　韶・山内一弘・中西　光（1995）．合宿保育の実践的研究 Ⅺ――20回の実践を終えて――　日本保育学会第48回大会発表論文集, 330-331.

花篤實・岡田けい吾（1994）．造形表現（理論・実践編）　三晃書房

小林由憲（1987）．保育行事についての調査研究――北陸三県を中心として――　日本保育学会第40回大会発表論文集, 216-217.

峯　岩男・二宮　穣（2003）．園内型お泊り保育についての考察――合同保育の実践的研究Ⅻ――　日本保育学会第56回大会発表論文集, 32-33.

文部科学省（2008）幼稚園教育要領．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm（情報取得2012/01/16）

清水益治・岡嶋淳子・米田匠子（2003）．附属幼稚園における宿泊保育に関する研究――宿泊保育前の生活習慣と直後の子どもの様子――　大阪樟蔭女子大学論集, 40, 157-164.

谷田貝公昭・村越　晃・西方　毅・鹿又直子（1988）．合宿保育について――保育学会を中心にして――　日本保育学会第41回大会発表論文集, 568-569.